

【13】 深浦沿革誌寄贈配賦控

写1冊(4814)

〔書名よみ〕むつつがるふかうらえんかくし 〔著編者〕海浦義観

〔写刊年次〕明治三十一年(一八九八)

〔外題〕明治卅二年一月 深浦沿革誌寄贈配賦控

〔内題〕ナシ

〔その他題〕ナシ

〔残欠状況〕全 〔保存状況〕小破(汚損、疲れあり) 〔装訂〕折

紙(綴葉装) 〔紙数〕一七丁 〔本文用字〕漢字・平仮名 〔一面

行数〕九行 〔界線〕ナシ 〔表紙〕本文共紙 〔法量〕縦二・四

糎×横一七・六糎 〔料紙〕楮紙(美濃紙) 〔書入〕ナシ 〔表紙

書入〕ナシ 〔印記〕ナシ 〔備考〕ナシ

〔奥書〕ナシ

〔解題〕

『陸奥津軽深浦地方沿革誌』を寄贈した相手とその部数を記した手控えである。冒頭に「忒部 内務省へ納本」とあるのは、あらゆる印刷物を発売頒布の前に内務省に納めることを規定した、出版法の規定に基づくものだと考えられる。二部納められた印刷物は、内務省警保局によって検閲され、問題ないとされたもののみ発売頒布が許された。この手続きを経ないものは違法、俗に言う地下出版物となり、確認され次第出版法違反に問われた。

この控えには他に「創立員配部」として、深浦保勝会のメンバー全員

に配付されたことが明記されている。また、序文を寄せた「陸実」(羯南)、外崎覚にはもちろん、釈雲照や仁和寺門跡の浦上隆應、東京の密厳教報社や京都の伝燈会など仏教関連出版社、義観の漢文の師である矢土勝之や三嶋中洲、井上哲次郎(控えでは「哲二郎」と記されている)や依田学海といった学者たちに寄贈している。さらには、伊藤博文、当時の総理大臣である山県有朋、宮内大臣の田中光顕子爵(二部贈呈)といった政治家など、在京の各界の人びとに献本していたことが分かる。青森県関係者については、東奥日報社や東京に暮らす津軽檜麿子爵にも贈っている。

いずれも深浦保勝会の意思というよりは、義観自身の人脈の広さを示すものであると同時に、自身の手による深浦の地誌を伝えたいという義観の強い意欲を感じさせるものである。

(尾崎 名津子)



